

「互に愛し合いなさい」

申命記 第10章12節～15節
ヨハネによる福音書 第15章12節

説教 岡村恒牧師

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」(ヨハネによる福音書15章12節)これが2013年、大阪教会に与えられた標語です。標語は努力目標ではなく、神がこの1年、語りかけて下さる恵みの御言葉です。1つ1つの言葉の意味を1年かけて丁寧に受け止めていきたいと思えます。

これは、主イエスが十字架にお架かりになる前に遺言をお話になるように語られた説教の一部です。たとえ死ぬことになっても、あなたを裏切るようなことはしません。そう誓ったペテロがこの少し後、イエスなる人を私は知らないと否認します。主は、そのような弱さを抱えた私たちのことを全てご存じでした。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」(15章5節)そう言って弟子たちが毎日見るぶどうの木を指さすようにお語りになりました。神に喜ばれるような実を実らせることができない私たちを、つぎ木をして、実がつく枝にして下さるために、ご自身は深く傷つきながら、命を与えて下さいました。これが主イエスの愛し方です。

標語のすぐ後に有名な言葉が続きます。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。あなたがたにわたしが命じることを行なうならば、あなたがたはわたしの友である。」(15章13節～14節)とても分かり易い言葉です。主イエスは、裏切り者の弟子たちや私たちの為に命を捨てて下さったのです。ご自分の命を捨てる程に徹底的に愛し抜く愛、それが神の愛です。

キリスト教はしばしば、隣人愛を説く宗教だと説明されます。しかし聖書に書かれているのは隣人を愛するように生きなさいと言う教えではありません。神がどのように私たち一人一人を愛して下さいたか、そのことが書かれています。そして、愛された者が、そこからどう生きるかという話をするとき初めて、隣人を愛して生きるという道が示されています。

「わたしがあなたがたを愛した。」と言う主イエスの宣言が最初にある、「互に愛し合いなさい。」という道が開かれます。誰もが自分を大事にしたいし、自分の傍らにいる人を大事にしたいと思うでしょう。しかし、それがなかなか実現をしないのが現実です。聖書は、それが可能になり実現していく道を指さしています。

聖書が初めて日本語に翻訳されたとき、それを手伝ったのは漂流した難民の日本人の漁師だったと言われます。〈神の愛〉と言う言葉は「神の御大切(ごたいせつ)」と訳されました。愛と言うのは大切にすること。目の前の宣教師が自分を愛してくれるように、全知全能の神がこの私を大切だと言って下さる。後にこの〈御大切〉という言葉は、〈愛〉と言い表されるようになりました。

キリスト教会は、主イエスの死と復活を全世界に証しをして歩んできました。主イエスの死と復活を信じる、この1点において神の愛がどれほど深く、長く、大きく、高いかを、十字架に目を凝らして主イエスの死に集中するとき私たちは初めて知ります。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」(マタイによる福音書 27章46節)これは、本当はここにいる私たちが叫ぶはずの叫びでした。しかしあの日、主イエスが私たちに代わってこの絶望の叫びを叫んで下さいました。

私たちはこの1年、「わたしがあなたがたを愛した。」と言う言葉の深みを一緒に味わいたいと思えます。そして同時に、互いに愛し合うということに取り組んでいきたいと思えます。それは決して実現不可能なことではありません。主が可能性を与えて下さった道筋です。

まず、1人の人を思い浮かべて下さい。愛することが容易な人、困難な人でも結構です。この1年、その人の為に祈り、慰め、励まし、一緒に神の前に立つ日を望みみて歩みたい。そう心に決めて下さい。もし1人に絞るのが困難でしたら2人、3人でも結構です。その人が救われて神の国に一緒に入るために、主イエスは十字架の上で苦しみ、命を与えられました。その人の為に祈り、愛し、仕えることは神の御心にかなうことです。神がお与えになった喜びの務めです。

主イエスは私たちの救い主です。徹底的に神のひとり子が私たちを大事にして下さった、今も大事にして下さっている、永遠に大事にして下さる。その聖書の言葉の意味も私たちは味わうようになります。今年、この標語が与えられたことを主に感謝して、私たちの1年の信仰の歩み、祈りの生活の上に主の祝福を願い求めましょう。

(記 説教要約奉仕者)

